

群 教 セ	H01 01
	平16.221集

# 友だちと意思を出し合いながら遊ぶ

## 幼児の育成

### ごっこ遊びにおける状況づくりを通して

特別研修員 小池 恵子 (北橋村立北橋幼稚園)

#### 研究の概要

本研究は、ごっこ遊びにおける状況づくりを通して、友だちと意思を出し合いながら遊ぶ幼児を育成しようとしたものである。具体的には、幼児の発達の時期や実態に応じて、幼児が意思を出したり、イメージしたものになりきったりして遊ぶ状況づくりをし、そばにいる幼児の存在に気付く、まわりにいる幼児に親しみの気持ちをもつ、友だちと意思を出し合おうとするという幼児の変容をとらえようとするものである。

【キーワード：幼児教育 人間関係 意思を出す ごっこ遊び 状況づくり】

#### 主題設定の理由

幼稚園における幼児の姿をみると、自分の意思を読み取ってくれる教師などの大人とは積極的にかかわるが、幼児同士では、うまく意思を出し合って遊べないという様子が見られる。少子化の影響からか、家庭において、自分から行動しなくても、大人が先に幼児の欲求を読み取り、快適に生活できる状況をつくってくれており、自分から意思を出したり、かかわりを求めたりすることが少なくなっているためではないかと思われる。幼児期は、他者の存在に気付き、かかわりを求め始める時期であることを考えると、幼稚園において同年齢や異年齢の幼児がかかわり合って生活することの意義は大きい。3歳児は、自己中心的な生活から友だちへ関心が向き始め、自我の発達の基礎が築かれていく重要な過程である。教師や友だちと一緒に生活する中で、楽しさ、うれしさ、怒り、悔しさなどの様々な感情を体験しながら人とかかわる力の基礎を培っていくことが大切であると考えられる。

本学級は、3年保育3歳児、男児9名、女児10名、計19名の学級である。教師に対して親しみを感じ始めている。幼児同士では「一緒に遊ぼう。」と誘ったり、それに応じたりといった姿が見られる。一方で、自分のしたい遊びを見つけると、そばにいる幼児への関心は薄くなり、そばにいる幼児の存在をあまり気にとめずに遊んでいることが多い。このような幼児たちが、次第に、まわりにいる幼児に目を向け、関心をもってかかわっていくようになってほしいと願っている。

幼児同士がかかわるきっかけとなる共通のイメージをもちやすく、友だちとかがわって遊ぶことに楽しさを感じ、意思を出し合いながら遊ぶようになってほしいと思われるごっこ遊びに視点をあて、研究を進めていきたいと考えた。

これまでの保育を振り返ってみると、発達を見通し、幼児同士が意思を出し合いながら遊ぶことを意識した状況づくりが十分でなかった。そこで、ごっこ遊びにおける状況づくりを通して、友だちと意思を出し合いながら遊ぶ幼児を育成したいと考え、本主題を設定した。

#### 研究のねらい

ごっこ遊びにおける状況づくりを通して、友だちと意思を出し合いながら遊ぶようになることを実践を通して明らかにし、人とかかわる力の基礎を培う。

## 研究の見通し

- 1 幼稚園で安定して生活し、好きな遊びをしようとする時期には、幼児が教師と一緒にいることで安心感をもち、素材や用具に興味をもって遊びだせるような状況をつくれば、自分の思いを出そうとするようになり、教師や自分のそばにいる幼児の存在に気付くようになるだろう。
- 2 まわりにいる幼児と一緒に遊ぼうとする時期には、幼児がまわりにいる幼児の真似をしてみたいと思って、遊びだせるような状況をつくれば、自分の思いを出すようになり、まわりにいる幼児に親しみの気持ちをもつようになるだろう。
- 3 友だちと一緒に遊びを楽しむようになる時期には、幼児が友だちと一緒に動くことの楽しさを感じ、イメージしたものになりきって遊べるような状況をつくれば、友だちと思いを出し合いながら遊ぶようになるだろう。

## 研究の内容と方法

### 1 研究の内容

#### (1) 友だちと思いを出し合いながら遊ぶ幼児について

本研究における友だちとは、幼児自身が自分の友だちであるという感覚をもつ幼児とし、具体的には、一緒にいたい、一緒に遊びたい、自分の思いを受け止めてほしいと思う幼児ととらえた。思いを出し合いながら遊ぶとは、互いの存在を意識した上で、思いを言葉や体の動きにして出し合いながら遊ぶことととらえた。

幼児は、幼稚園で安定して生活し、好きな遊びをしようとする時期、まわりにいる幼児と一緒に遊ぼうとする時期、友だちと一緒に遊びを楽しむようになる時期を経ていく中で、友だちと思いを出し合いながら遊ぶようになるために必要な経験を重ねていく。

それぞれの時期における必要な体験を重ねていると思われる具体的な姿をあげてみる。

#### < 幼稚園で安定して生活し、好きな遊びをしようとする時期 >

教師とのかかわりで安定し、「 がしたい」などと教師に言い、してみたいと思った遊びをする。また、自分のそばにいる、あるいは、自分と同じようなことをしている幼児の様子を見たり、そばに行ったり、言葉をかけたりする。

#### < まわりにいる幼児と一緒に遊ぼうとする時期 >

まわりにいる幼児に関心をもち、同じ用具を手にしたたり、真似をしたりしながら遊ぶ。また、一緒に遊びたいと思った幼児に「一緒に遊ぼう。」と言葉をかけたり、手をつないだり、名前を呼んだりして行動を共にしようとする。

#### < 友だちと一緒に遊びを楽しむようになる時期 >

「一緒に遊ぼう。」「いいよ。」「何をして遊ぶ？」など思いを言葉にし、会話をする。また、一緒に遊んでいる幼児と同じ動きをしたり、同じものを身に付けたりすることに楽しさを感じ、繰り返し取り組む。さらに、友だちと一緒に見立てをし、なりたい役になり、それらしく動いたり、なりきってやりとりをしたりする。

#### (2) ごっこ遊びにおける状況づくりについて

幼児の生活は連続性があり、家庭での体験をそのまま幼稚園に持ち込んでくることが多い。そのため、家庭のイメージを持ち込んだままごとや、好きなテレビ番組のキャラクターの真似といった遊びでは、入園当初の全くかかわりのない幼児同士であっても、共通のイメージをもつことが容易であり、かかわったり、親しみを感じたりしやすいようである。ままごとや真似たり見

立てたりする遊びをごっこ遊びととらえ、共通のイメージをもっている実態を生かすことで効果的な状況づくりができるものと考えた。

幼児の発達の時期に応じ、次のような状況をつくる必要がある。

- ・ 幼児が、教師とのやりとりを楽しみながら、次第に他者の存在に気付いていける状況
- ・ まわりにいる幼児に親しみの気持ちを持ち、かかわりたくなる状況
- ・ 友だちとつながりを感じながら、一緒に遊びたくなる状況
- ・ ごっこ遊びにつながる、幼児が使いたくなるような素材・用具がある状況

このような状況をつくるため、次のことに留意する。

- ・ ごっこ遊びと一緒に楽しむ教師の役割として、一人一人の幼児が安心して自分の思いを出せるような雰囲気を作る、遊びの楽しさを感じられるように盛り上げていく、それぞれから出された思いをつなげる、幼児が友だちとのつながりを感じて思いを出し合おうとする姿を支える。
- ・ 素材・用具を見た幼児が「これを使ったら楽しくなりそうだ」などの思いをもてるものであるか、ごっこ遊びにつながるものとして適切であるか、幼児の発達段階に沿っているかなどに視点をあて、素材・用具を研究する。

## 2 研究の方法

研究の見通しに基づき、以下の計画で保育実践を行い、検証する。

### (1) 実践計画

対象	北橘村立北橘幼稚園 3年保育 3歳児 19名（男児9名 女児10名）
期間	平成16年4月～10月

### (2) 検証計画

検証項目	検証の観点	検証の方法
見通し1	幼稚園で安定して生活し、好きな遊びをしようとする時期には、幼児が教師のそばにいて安心してできるよう温かく接していくとともに、幼児が興味をもちそうな素材や用具を用意し、使いやすいように出しておいたり、教師が使ってみせたりすることは、自分の思いを出そうとし、教師やそばにいる幼児の存在に気付くことに有効であったか。	教師による観察に基づき考察を行う。 〈観察の視点〉 ・ 幼児の表情、言葉、体の動き 〈考察の視点〉 ・ 幼児の変容から、状況づくりの有効性について、考察する。
見通し2	まわりにいる幼児と一緒に遊ぼうとする時期には、幼児が友だちの真似をして遊べるように同じ種類のものを豊富に用意し、してみたいと思ってかかわるようなきっかけを作ることは、まわりにいる幼児に親しみの気持ちを持ち、自分の思いを出すために有効であったか。	
見通し3	友だちと一緒に遊びを楽しむようになる時期には、友だちと一緒に動くことの楽しさを感じられるような状況をつくり、身に付けていることでそのものになりきって遊べるような素材・用具を用意することは、友だちと思いを出し合いながら遊ぶために有効であったか。	

## 研究の展開

3年保育3歳児の教育課程、 、 、 期のねらい、内容をふまえて実践する中で、友だちの存在に気付く、自分の思いを出す、友だちと思いを出し合うといった幼児の姿の変容に視点をあて、ごっこ遊びにおける状況づくりについて、その有効性を明らかにしていく。

1 〃 〃 期の指導計画

<北橋村立北橋幼稚園年間指導計画より抜粋>

期	期(4月上旬~5月上旬)	期(5月中旬~7月)	期(9月~10月)
ねらい	幼稚園や教師に対する安心感をもつようになる。 園生活のリズムに慣れ、幼稚園で過ごすことに安心感をもつようになる。	好きな遊びを教師や友だちと楽しむようになる。	好きな遊びを教師や友だちと一緒に楽しむようになる。 友だちと思いを出し合いながら遊ぶようになる。
内容	・自分の保育室や担任の教師について知る。 ・教師と一緒に遊ぶ。 ・好きな場所や遊具を見つけて安心して遊ぶ。 ・したいこと、してほしいことを教師に言葉や身振りで伝えようとする。	・友だちと同じ遊びをしたり、時にはケンカをしたりしながら、近くであるいは一緒に過ごす楽しさを感じる。 ・友だちの真似をしたり、同じ物を持ったりしながら、友だちのかかわりを楽しむ。	・友だちの登園を楽しみに待ったり、好きな遊具や遊び場で一緒に遊んだりする。 ・作ったり、役になりきったりして遊ぶ中で、自分なりのイメージを表現する。 ・何人かの友だちと誘い合い、やりとりを楽しみながら遊ぶ。

2 検証にかかわる各時期での状況づくり

時期	幼稚園で安定して生活し、好きな遊びをしようとする時期	まわりにいる幼児と一緒に遊ぶようになる時期	友だちと一緒に遊びを楽しむようになる時期
状況づくり	・不安な気持ちの表し方は、それぞれであり、ありのままの姿を受け入れることにより、教師に対する安心感をもてるようにする。 ・砂場には周辺にベンチをおき、ゆったり座って遊んだり、シャベルなどを手にとってすぐに遊びだせるように目に付きやすい所に並べておいたりする。	・まわりにいる幼児と同じものを持って遊びたいという幼児の欲求にこたえられるよう、同じものを十分な量用意する。また、幼児が、色に興味をもったり、ジュースに見立てて遊んだりできるように色水を用意する。 ・幼児がしてみたいと思ったことに安心して取り組んでいけるように、それぞれの思いを読み取り、かかわるきっかけを作る。	・友だちとのつながりを意識できるような機会を意図的に作る。また、友だちとじっくり好きな遊びを楽しめるような場を作る。 ・幼児が親しんでいるキャラクターのお面や色つきのマントを用意したり、曲をかけたりして、そのものになりきって遊ぶことを楽しめるようにする。 ・ブロックその他を繰り返し使って遊べるように用意しておく。

研究の結果と考察

1 幼稚園で安定して生活し、好きな遊びをしようとする時期には、幼児が教師のそばにいて安心できるよう温かく接していくとともに、幼児が興味をもちそうな用具を用意し、使いやすいように出しおいたり、教師が使って見せたりすることは、自分の思いを出そうとし、教師やそばにいる幼児の存在に気付くことに有効であったか

【4月26日~27日】教師のそばにいて安心しているA児、入園当初の不安から口数の少ないB児と手をつないだり、体に触れたりしながら、幼児への親しみの気持ちを示し、「今日も一緒に遊ぼうね。」と声をかけた。A児が戸外で遊びたいと言ったので、教師は、B児も誘って手をつなぎ、戸外へ出て行った。砂場の前までくると、A児が「あれがしたい。」と砂場を指差し、教師の手を引いた。手にとりやすいであろうと思って並べておいたシャベルを持ち、「ごはんを作ろう!」と砂を皿に盛り始めた。一緒にいたB児に「Bちゃんもやってみる?」と聞くと、にっこりして教師の手を離し、シャベルを持った。教師は「こんなに山盛りにしちゃった。」と言いながら、砂を皿に盛って見せた。B児も砂場に座り込んで、砂を皿に盛り始めた。

A児が「先生、ご飯できたよ。」と、砂を山盛りにした皿を教師の前に差し出した。「すごく山盛りだね。先生、お腹がぺこぺこだよ。いただきます。」と言いながら、大きな動きで、食べる真似をした。二人は、教師の食べる様子を笑顔で見ている。教師が食べ終わった姿を見て、すかさずB児が「これも食べて。」と、自分の持っていた皿を差し出した。「わ~、Bちゃんもくれるの?」

うれしい。」と食べ始めると、B児はにっこりし、もう一度作ろうとして自分で皿を取りに行った。二人は、次々と皿に砂を盛っては教師に渡し、教師の反応を見て笑ったり、「もっと作ってくる！」と言ってきたりして、教師とのやりとりを楽しんでいる様子だった。

翌日、登園してきたA児は教師の手をとり、「今日も砂場で遊ぼう。」と言ってきた。教師も応じ、B児にも「今日も砂場に行ってみる？」と声をかけると、にっこりして教師のそばに来た。前日同様に教師とのやりとりを数回繰り返して、二人が一緒に笑う姿も見られた。A児が再び砂を盛り、教師に渡したところで、一口食べる真似をした後、B児の存在に気付くきっかけになればと思い、「先生、お腹いっぱいになっちゃった。もう食べられないよ～」とおどけて言った後で、「Bちゃんにあげる？」と聞いてみた。A児は一瞬驚いた表情を見せたが、「これ食べていいよ。」と、隣りに座っていたB児に皿を差し出した。

以上のことから、初めは、親しみを感じている教師にしか目が向いていなかったA児が、教師とのやりとりを通し、そばにいる幼児(B児)の存在に気づき、言葉をかけることができた。教師と一緒にいることで安心感をもたせ、幼児が遊びたいと思えるような用具を目に付くところに用意しておいたことは、幼児が思いを出そうとすることに有効であった。また、教師と一緒にかかわって遊び、やりとりを楽しんだことは、そばにいる幼児の存在に気付くことに有効であった。

2 まわりにいる幼児と一緒に遊ぶとする時期には、幼児が友達の真似をして遊べるように同じ種類のものを豊富に用意し、してみたいと思ってかかわるようなきっかけを作ることは、まわりにいる幼児に親しみの気持ちをもち、自分の思いを出すために有効であったか

【6月22日】C児は、自分で混ぜて作った、橙、緑、紫などの色水が入ったペットボトルを並べていき「これはオレンジジュースだよ。」と色水をジュースに見立てていた。その言葉を聞いた教師が「おいしそうだね、喉も渴いたし、オレンジジュースくださいな。」と声をかけた。「はいどうぞ。」と、C児は自分の作った色水をコップに注いでくれた。そのやりとりを見ていたD児も、「ぶどうジュースができたよ、はい！」と教師に注いでくれた。C児が「もっといっぱい作る。」と言うと、D児も「私も作る。」と言って、二人はそれぞれに色水を混ぜていた。

何種類も色を混ぜていくうちにC児の色水は茶色になっていき、C児は「全部入れたらお茶になったよ。」と教師に伝えてきた。「お茶もできたの、すごいね。先生は、お茶も大好きだよ。」と答えた。「もっといっぱいできるよ。」と言い、さらに色水を混ぜていくと、ペットボトルからは色水が溢れ出し、テーブルの上にも流れ出した。「きゃー！」とC児は歓声をあげた。水が流れきると、隣りにいたD児が「今度は私がやってみる。」と言って、水を溢れさせ「きゃー！」と二人が声をそろえて歓声をあげた。二人は、「もっとしよう！」と何度も色水を溢れさせては歓声をあげ、水が溢れることとともに、二人で声を出すことを楽しんでいるようだった。

保育室へ戻る際、C児は「Dちゃん、一緒に行こう。」と手をつなぎ、時折顔を見合わせながら笑顔で走っていった。

以上のことから、してみたいという思いを出して色水遊びを楽しんでいた幼児たちが、教師とのやりとりや色水が溢れたことがきっかけとなり、まわりにいる幼児に親しみの気持ちをもつことができた。友だちと同じものを作れるようにペットボトルや色水を豊富に用意したことは、自分の思いを出し、まわりにいる幼児に親しみの気持ちをもつために有効であった。

3 友だちと一緒に遊びを楽しむようになる時期には、友だちと一緒に動くことの楽しさを感じられるような場面を作り、身に付けていることでそのものになりきって遊べるような素材・用具を用意することは、友だちと思いを出し合いながら遊ぶために有効であったか

【9月～10月中旬】(注 デカレンジャー、プリキュアなどは、幼児が好んで見ているテレビ番組のキャラクターの名称である。)

幼児は、「デカレンジャーやプリキュア」のお面を付け、曲をかけると、自然と走り出したり、踊りだしたりして、キャラクターに変身したつもりになって動くことを楽しんでた。

この実態から、教師は、「運動会でも変身して走ったらすごく早く走れそうだね。」と言葉をかけた。幼児は「僕はデカレッドになる！」「私はプリキュアホワイトがいい！」と自分のなりたいたいのものをうれしそうに教師に伝えてきた。

それぞれの幼児が希望したお面を用意すると、「Eちゃんもデカレッド？」「同じだね。」と同じキャラクターを選んだことに親しみを感じたり「Fちゃんはデカグリーン？」と一緒に遊ぶことの多い幼児同士が、お互いのキャラクターに関心を示したりしていた。

変身したつもりになった4～5人の幼児が教師を敵に見立てて追いかけ、「まいった～。」と教師が言うと、「へへ～。」と顔を見合わせて笑う姿や、「くるくるっとするやつ(棒の先に紙テープをつけたもの)がほしい。」と言って教師と一緒に作り、ポーズをとって踊る姿などが見られ、友だちと一緒に動くことの楽しさを味わっているようだった。

運動会当日は、普段と違う雰囲気戸惑う幼児の姿も見られたが、まわりの幼児がお面を付け、準備を始めた様子を見て、表情が和らいだ。ほとんどの幼児は、キャラクターになりきり、張り切って走る姿が見られ、戸惑いを感じていた幼児も一緒に走ってゴールすることができた。

運動会後も、デカレンジャーのお面や剣、ブロックで作った武器を持って走ったり、高い所から飛び降りたりしてデカレンジャーのイメージの動きを楽しんでいた。一人の幼児が飛び降りると、次々に同じ様に飛び降りるなど、友だちと同じことをしたいという思いが感じられた。「Eくん、おれがやられたら助けにきてくれ。」「わかった。」と、テレビのイメージの口調で友だちとやりとりをし、「あっちに怪獣がいるぞ！」と想像し「大変だ！いくぞ！」「おう！」と声をかけ合い、ブロックで作った武器を持ち、4～5人の幼児が連なって走って行く様子も見られた。

以上のことから、運動会では、キャラクターのお面を付けることで、より友だちと一緒に動く楽しさを感じられたようだ。その後も自分でお面を付けたり、ブロックで武器を作ったりして、変身したつもりになって友だちとのやりとりを楽しむようになった。身に付けてみたいと思えるようなお面などを用意し、友だちと一緒にそのものになりきって動いたり、やりとりしたりするような状況づくりをしたことは、友だちと思いを出し合って遊ぶために有効であった。

#### 研究のまとめと今後の課題

幼児の発達に合わせ、状況づくりを行った結果、友だちの存在に気付き、言葉をかける、親しみを感じて手をつなぐ、同じものを身に付け、なりきってやりとりをするなどの姿が見られるようになった。状況をつくり、友だちと一緒に遊びながら、親しみや楽しさを感じていくと、友だちと思いを出し合えるようになることがわかった。

一人一人の幼児によって思いの表し方に違いがあるため、個々に合わせた状況づくりが重要であった。幼児をより深く理解しようと努めていくことで、どのような状況をつくれればよいのかが明らかになってくることがわかった。

本研究においては、ごっこ遊びに視点をあて進めてきたが、幼稚園では様々な遊びが展開されている。今後は、本研究での成果を他の遊びにおいても生かして、幼児が人とかがわって遊ぶことの楽しさを十分に味わえるようにし、「友だちっていいな」と思えるような体験を重ねていくことにより、人とかがかわる力の基礎を培っていきたいと考える。

#### <参考文献>

- ・ 森上 史朗・高杉 自子・柴崎 正行 編 『幼稚園教育要領解説』フレーベル館 (1999)